ミュージアム通信

Shu Ogawara

小川原脩記念美術館　倶知安風土館
☎21-4141　☎22-6631

開館時間は 9 時～ 17 時
（入館は 16 時 30 分）
10 月の休館日
6 日、13 日、19 ～ 23 日、27 日

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原 脩 自伝風な展覧会―夏・空よ！」
会期：開催中 10 月 18 日（日）まで

「小川原脩　ベストセレクション」
小川原脩の代表作のほか、人気の作品や、改めてその魅力を紹介したい作品を集めました。
会期：10 月 24 日（土）～ 12 月 13 日（日）

■企画展示

「第５７回　麓彩会展」
会期：開催中 10 月 18 日（日）まで

「竹岡羊子展―カーニバルに魅せられて」
長年、ヨーロッパを中心にカーニバルを取材し、その華麗な祭りの姿を描き続けている竹岡羊子さん。200 号の大作から、旅のメモであるコラージュ小品まで多彩な作品をご紹介します。
会期：10 月 24 日（土）～ 12 月 13 日（日）

＜竹岡羊子展関連イベント＞
10 月 24 日（土）アーティスト・トーク（予定）
11 月 8 日（日）14 時　ミュージアム・コンサート「カーニバルの宴」
演奏：コンセール・アミ（テノール、ピアノ、バイオリン、クラリネット）
会場：当館ロビー　料金：無料

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

エコール・ド・パリ物語　①「パリをめざすボヘミアンたち」
日時：10 月 3 日（土）14：00
講師：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

その他お知らせ

小川原脩記念美術館開館記念日　無料開放
11 月 3 日（火・祝）9：00 ～ 17：00（入館は 16：30 まで）
小川原脩記念美術館は今年で開館 17 年目を迎えます。当日は展覧会が観覧無料となります。
第 8 回「ふるさとを描こう」絵画コンクール表彰式も開催されます。ぜひご来館ください。

第 8 回「ふるさとを描こう」入賞発表
絵画コンクールへのたくさんのご応募ありがとうございました！入賞の発表は学校を通してお知らせいたします。また、HP にも掲載します。

美術館長から

先日、何とも嬉しいニュースが入った。当館の土曜サロンに参加したことがあるニセコ出身の北大の先生が、賛同する仲間と一緒に、札幌のカフェで同じような講座を開きたいとのこと。話す側と聞く側、お互いの息づかいが分かるような親密な空間で、市民同士の交流の場にしたいというのだ。そういえば、かつてのパリのカフェは、コーヒーを飲みに行くというより、むしろ人との交わりを求めて集まる場、いわば庶民のサロンでした、などと相槌を打っていたら、第 1 回目としてカフェの話をすることになってしまった。土曜サロン、いよいよ札幌の街へ進出です。

館　長　柴（しば）　勤（つとむ）

音楽とワインのひととき

8月29日（土）、小川原脩記念美術館で音楽とワインの夕べが開催され、64名の来場者は、小樽市出身、ニューヨーク在住のピアニストであり作曲家の野瀬栄進さんの演奏とワインを楽しみました。

平成18年より小川原脩記念美術館友の会によって企画されたこの催しも今年で10回目を迎えます。

野瀬さんの繊細かつ迫力のある演奏と、曲が生まれたエピソードなどに、来場者は聴き入りました。

来場者からの熱烈なアンコールでは、野瀬さんがリクエストを募る場面も。

その日、誕生日を迎えた来場者へお祝いの曲を披露するなど、とても温かな雰囲気が包む演奏会となりました。

海と山と田園と
ミュージアムロード情報

【クローズアップ：木田金次郎美術館】
「木田金次郎と昭和 30 年代」「岩内大火」からの復興ではじまる昭和 30 年代。木田の活躍を町の歩みや同時代の北海道美術の流れとともにご覧ください。会期：開催中～ 11 月 3 日（火・祝）「あれから 30 年　岩内線廃止とたら丸誕生」（10 月 18 日（日）まで）も開催中！
■木田金次郎美術館
☎ 0135-63-2221

感動の一点

『飛翔』

1977年　小川原　脩　画

濃紺の空と、淡い赤紅色の大地。はっきりと二分された画面には、大白鳥が描かれている。1960年代から70年代にかけて、小川原脩の主な題材となっている馬・犬・大白鳥といった動物たち。それらの作品からは、動物たちの姿を通して「個と群れ」というテーマが投げかけられる。

この作品もまた、離陸する飛行機のように角度をつけて飛び立ってゆく数羽の白鳥の群れと、大きく手前に描かれた一羽との対比が印象に残る。大きく翼をひらき、首を伸ばす様子は、群れを追って飛び立つ瞬間か、それともその場にとどまり群れの行く先を見送っているのか。白鳥の表情からその思いを読み取ることは難しいが、かえってそれが観る者の心情をそのままに映し出すのではないだろうか。

きりりと引き締まった構図に柔らかな羽を感じさせる、美しい作品である。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

391回

―稔りの秋―

すっかり高くなった空を背景に、羊蹄山の頂から紅葉が降りてくる。大地では作物の収穫に忙しく、まさに稔りの秋である。この様子は森でも同様で、たくさんの樹木がいっせいに果実をつけている。

樹木が果実や種子を実らせるのは繁殖のためだ。しかし樹種によって種子の大きさと数にはとても大きな違いがある。例えば、シラカバは翼を持つ1～2ミリの小さな種子を数万から数十万の単位でばらまく。その一方で、大きなドングリをつけるナラやクルミの仲間が実らせる数といえば、木の大きさや年で豊凶はあるものの、せいぜい数百から千だろう。どうしてこんな差があるのだろう。

結論を言えば、ばらまき方に差があるからだ。シラカバは種子を風によってばらまく。たまたま条件の良い場所に落ちた種子だけが育つことができる。この方法は、いわゆる下手な鉄砲で、種を維持するためには膨大な数の種子が必要になり、そうするとどうしても種子を小さくせざるを得ない。

他方、大きな種子をつけるナラやクルミでは、リス、ネズミ、カケスなどの動物の助けを借りて種子を散布する。感謝の気持ちが込められているから大きいと言うのはウソで、散布して貰うためには魅力的な存在でなければならない。事実、これらの動物たちの食べ残しから次の世代が育つ。つまり大きな種子には散布に対する報酬の意味がある。

だからと言って、ナラやクルミは決して動物のために種子をつけるのではない。その証拠にナラは化学物質で種子を不味くしているし、そのような物質を含まないクルミは硬く厚い殻で防御している。そこには、散布の報酬を払うのは仕方ないが、できるだけケチりたいという木の本音が透けて見える。

せっかくの稔りの秋がなんともケチくさいハナシとなってしまった。筆者の性格を反映しているのだろうが、どうもヨロシクないなぁ。

文：岡崎　毅（倶知安風土館館長）